

教育センター通信

ほど 火床の火の心を紡ぐ

第3号 (通算 108号)
令和5年6月30日
三条市教育委員会
教育センター発行

小中一貫教育
トップページ



5月20日(土)
三条学園
上林小学校運動会での中学生ボランティア

「構え」と「予測」

統括指導主事 松原 康之

先日、1年8か月ぶりの復帰戦で優勝したテニスの錦織圭選手の試合の様子を見ていて、ふと、かつて勤務校の学年主任からテニスを教えてもらった時のことを思い出しました。最初に教わったことは「構え」と「予測」の大切さでした。「構え」や「予測」は、テニス等のスポーツだけでなく、学校教育の中でも大切なものです。中でも学校安全における「構え(心構え)」と「予測」は、子どもたちが生き生きと活動し、安全に学べるようにするためには不可欠だと考えます。

独立行政法人日本スポーツ振興センターの『学校の管理下の災害[令和4年度版]』(令和4年12月)によれば、令和3年度に発生した負傷・疾病の発生件数は、小学校と中学校合わせて546,603件で、6月に最も多く発生しています。給付件数で見ると、死亡見舞金が小・中学校合わせて23件、障害見舞金が小・中学校合わせて172件給付されており、尊い命が失われたり、重い障害を負うことになったりしている事故も発生していることが分かります。同書には重大事故事例とその留意点が記載されています。小学校と中学校の事例に共通していえることは、同様の事故がこれまでも発生しているということです。同じ事故を繰り返さないためにも、事例に学び、事故が発生する危険性があることや事故発生後の的確な対応について「構え(心構え)」としてもつことが大切です。また、事故の要因となりそうなものを「予測」し、学校環境と学校生活等の安全管理に生かしていくことで事故の未然防止が期待できます。もちろん、子どもが安全教育を通じて身に付けた資質・能力を基に「予測」し、子ども自らが安全な行動を実践していこうとする「構え(心構え)」をもつことも大切です。是非、『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育(改訂2版)』(平成31年3月)等も参考にされ、子どもたちの笑顔が輝く安全な学校であり続けるために、学校における安全教育の充実と適切な安全管理をお願いいたします。

学園紹介（三条学園）

5月20日（土）、第三中学校1年生のうち、上林小学校出身の生徒が母校の運動会ボランティアに参加しました。

爽やかな青空の下、競技用具の運搬やゴールテープを持つ役など、一生懸命に取り組み、後輩たちを温かくサポートしながら、運動会を盛り上げてくれました。ボランティアに参加した生徒の感想には、「母校や後輩の役に立ててよかった」「小学生の頑張りに元気をもらえた」など、小中交流の成果が表れていました。



裏館小学校出身の1年生が参加する「三条まつりボランティア」は、小中の日程面から中止となりましたが、「三条学園 春の総会・全体研修会①」にて共有した推進計画のもと、今後も「あいさつ運動・標語づくり」などを通して、小中の交流を深めていく予定です。

また、児童生徒の交流だけではなく、相互乗り入れ授業の活発化や小中教科担当の打合せを適宜行うなど、教職員の連携も図っていきます。



学園紹介（しただの郷学園）

中1ギャップ解消の取組として、5月16日（火）に飯田小、森町小、笹岡小、6月6日（火）に長沢小、大浦小の情報交換会を行いました。

5限は、旧6年生担任が中学1年生の授業を参観し、6限は学習面や生活面について現在の様子と6年生当時の様子を比較しながらよりよい個別支援や合理的配慮の在り方について情報交換を行いました。中学生になって一人一人が頑張っている事実を共有し合い、成長を認め合うことができた時間となりました。

学園紹介（大崎学園）



大崎学園生徒会「双華会」の本部と前期運営委員が中心となってあいさつ運動を行いました。雨にもかかわらず、大崎学園生のいつもより元気なあいさつが玄関に響きました。

5月20日（土）に実施された前期体育祭には、後期学園生全員が応援に行きました。前期学園生は、競技を見てもらい、応援の声をかけてもらうことで、も

っている実力以上の力を出すことができました。後期学園生は、そんな全力の姿を見て、「自分たちもまねしたい」「エネルギーをもらった」と感想をもちました。異年齢交流バリアの小ささが大崎学園のストロングポイントです。大崎学園の合言葉、「ワンチーム」「大崎プライド」を具現している前期・後期学園生でした。



環境教育研修会 令和5年5月25日（木）

「かんきょう庵」と「清掃センター」を会場として、実施しました。



環境施策の説明と新聞紙を活用した「エコバック」作成

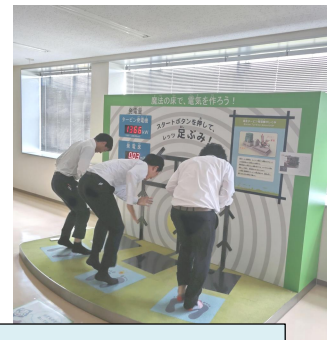


「かんきょう庵」では、「三条市の環境施策」「清掃センターの取組」について学びました。新聞紙を活用した「エコバック」の作製にも取り組みました。簡単に丈夫なバックを作ることができるので参加者からは「学校でも子どもと一緒に作ってみたい。」という声が多く聞かれました。

「清掃センター」では、実際にゴミ処理の様子を見学しながら、それぞれの役割についての説明を受けました。「事前に見学をすることができてとてもよかった。」「環境に関する重要なものを見ることができ、体験もできるという点に魅力を感じた。」との感想がありました。今後多くの学校で予定されている社会科見学や環境教育に関する授業に向けて、効果的な研修会となりました。



「清掃センター」の施設見学と説明



インクルーシブ教育システム研修

令和5年6月6日（火）開催

上越教育大学准教授の関原真紀様を講師にお迎えし、インクルーシブ教育システム研修を実施しました。インクルーシブ教育システムや合理的配慮の基本的内容や国の動向から、児童生徒の実態把握、教育的ニーズのある児童生徒の学びを中核とした教師間連携による授業づくりの在り方、具体的な実践事例まで幅広く御指導いただきました。講義の合間にペアトークを取り入れながら、参加者自身も学び、考える研修になりました。障害の有無に関わらず、全ての児童生徒が主体的に楽しく「分かる・できる」授業をつくるために、ユニバーサルデザインや自立活動などの特別支援教育の視点を取り入れていく大切さを再確認する機会となりました。



【参加者感想抜粋】

- ・ユニバーサルデザインや合理的配慮の必要性が再確認できたとともに、学習へのモチベーション向上が非常に重要であることが学びました。また、そうした授業づくりや学習支援は個別だけでなく、学校全体、教員同士で情報を共有することでより良い取組ができることも分かり、今後の教育活動に生かしていこうという意欲が湧きました。
- ・特に心に残っているのは、「本人ではなく、社会に障壁がある」という内容です。困り感がある児童も学びたがっているし、認めてもらいたがっているということにとっても共感できました。
- ・生徒の実態把握に関して、付箋などを書いて積み上げていき、支援の手立てを可視化するところから始めることで支援の共通理解や連携につなげていきたいと思えます。

WEBQU 研修①

令和5年5月24日（水）開催

三条市立学校では、これまで、教師の主観的な見取りだけに頼ることなく、Q-U心理検査を用いて客観的な数値でも児童生徒や学級の様子を把握し、学級経営に生かしてきました。このことは、とても効果のある取組ですが、結果が出るまでに時間がかかっていました。

そこで、今年度から、紙で行うQ-U心理検査を、タブレットを用いて行うWEBQU検査に変更しました。第1回目の研修では、WEBQUの導入にあたって、その特徴や実施への準備、活用方法を学びました。当日は各校と栄庁舎をオンラインで結び、37人の先生から参加いただきました。

WEBQU の特徴

- ・タブレット等を活用して行う心理検査。
- ・児童生徒の状態を客観的に把握でき、学級づくりに役立てることができる。
- ・内容的にはこれまで小学校6年生と中学校1年生で行っていたhyper - QU検査並みで、関わりや配慮のスキルについても客観的に把握し学級づくりに生かすことができる。
- ・結果がすぐに出るため早期対応が可能となる。
- ・結果が分かりやすく、分析にかけていた時間を短縮し、対応策の検討に時間をかけることができる。
- ・結果を担当だけでなく、学年部や管理職のタブレットで共有でき、チーム学校としての対応が可能となる。

WEBQUは各学校で6月を中心に1回目を実施されています。結果を分析し、楽しい学級、居心地のよい学級づくりのために積極的に活用してください。